

<研究ノート>

日本におけるゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスに関する調査報告（量的調査編）

小森田龍生

An Online Survey on Mental Health of Gay and Bisexual Men in Japan

KOMORIDA, Tatsuo

要旨：本稿では、日本における性的少数者（ゲイ・バイセクシュアル男性）のメンタルヘルス悪化のメカニズムを要因間の関連性と、時間の経過に伴う影響力の変化に注目して明らかにすることを目的として実施した調査結果の一部を報告する。

調査対象は、日本国内に居住する20～60歳までのゲイ・バイセクシュアル男性、および異性愛男性である（共に学生、および外国籍の者を除く）。調査の実施方法は民間調査会社に登録するアンケートモニターを対象としたインターネット調査である。回収数はゲイ・バイセクシュアル男性1,684件、異性愛男性1,854件であり、データクリーニング後のサンプルサイズはゲイ・バイセクシュアル男性1,668件、異性愛男性1,851件であった。

回答者の平均年齢は、ゲイ・バイセクシュアル男性41.69歳、異性愛男性47.26歳であった。メンタルヘルスについて、K6尺度をもちいてたずねた結果、ゲイ・バイセクシュアル男性の平均値は異性愛男性に比べて高く、メンタルヘルスの状態が悪い傾向にあることが確認された。また、メンタルヘルスに影響を与える要因のひとつとして想定しているいじめ・ハラスメント被害経験についてもゲイ・バイセクシュアル男性において経験割合が高く、クロス集計の結果からも2つの変数の関連性が示唆された。

キーワード：性的少数者、ゲイ・バイセクシュアル男性、メンタルヘルス、モニター調査

1. 調査の目的

本研究の目的は、日本における性的少数者（ゲイ・バイセクシュアル男性）のメンタルヘルス悪化のメカニズムを、要因間の関連性と、時間の経過に伴う影響力の変化に注目して明らかにすることである。

これまで、欧米を中心とした研究により性的少数者は異性愛者に比べて自殺リスクやメンタルヘルスに問題を抱える割合が高いことが指摘されてきた（Bolton & Sareen 2011；Sandfort et al. 2001；Plöderl & Tremblay 2015）。日本国内でもインターネット調査データの分析から、いじめ被害経験や性的指向のカミングアウト経験が、自殺未遂およびメンタルヘルスの悪化に有意な影響を与えることが指摘されている（Hidaka and Operario 2006）。しかし、国内の調査・研究の蓄積は欧米に比べて少なく、メンタルヘルスを悪化させる要因間の媒介関係や、要因の組み合わせにより生じる交互作用等について

では十分に検討されていない。また、政策的な対応策を検討する上では、要因（いじめ被害経験等）の経験時期や影響の及ぶ期間等、時間的な視点を考慮してメンタルヘルス悪化のプロセスを検証することが必要である。

そこで本研究では、日本国内の性的少数者（ゲイ・バイセクシュアル男性）を対象としたインターネット調査を実施することとした。調査の概要は後述するが、本研究における調査では、いじめ被害経験やカミングアウト経験の有無について、小学校入学前から現在に至るまでの時系列をおって確認することを試みた。本稿では、調査結果のうち、調査対象者の基本的な属性情報と主要な質問項目への回答の一部を提示する。

本研究の意義としては以下の点が挙げられる。まず社会的意義について、国内外の調査において、性的少数者が全人口に占める割合は3～8％程度と推定されている場合が多く（Gallup 2018；電通 2019；釜野ほか 2019；LGBT総合研究所 2019；Office for National Statistics 2020）、性的少数者のメンタルヘルス問題は日本だけでも約1,000万人に関わる可能性のある研究課題である。本研究により、性的少数者のメンタルヘルス悪化のメカニズムが解明されれば、政策的に適切な介入方法・タイ

受稿日2020年12月1日 受理日2020年12月15日

日本学術振興会特別研究員(PD)／上智大学総合人間科学部／専修大学経営学部兼任講師（Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science／Faculty of Human Sciences, Sophia University／Faculty of Commerce, Senshu University）

ミングを提示することが期待できる。また学術的な観点からは、日本の性的少数者のメンタルヘルス状況を捉えたエビデンス（比較軸）として、国際比較研究、およびゲイ・バイセクシュアル男性以外のセクシュアリティとの比較研究が可能となる。以上より、本研究は社会的・学術的に高い意義を有するものとする。

2. 調査概要

2.1 調査対象者

調査対象者は、日本国内に居住する20～60歳までのゲイ・バイセクシュアル男性、および比較対象としての同年齢層・異性愛男性である（共に学生、および外国籍の者を除く）。性的少数者のうち、対象者をゲイ・バイセクシュアル男性に限定するのは、国内の先行研究がゲイ・バイセクシュアル男性を対象としたものが多く、それらとの比較をおこなうためである（Hidaka and Operario 2006；Hidaka et al. 2008）。

本研究におけるゲイ・バイセクシュアル男性とは、身体的性別（出生届上の性別）が男性で、現在の性自認に違和感がなく、性的指向（性愛感情を抱く相手の性別）が男性、もしくは男性と女性の両方である人物を指す。

2.2 実施方法

調査の実施方法は民間調査会社に登録するアンケートモニター（以下、モニター）を対象としたインターネット調査である。調査は、対象者の選定を主目的とした事前調査と、本調査の2段階にて実施した。確率抽出法による調査ではないため結果に代表性はないが、変数間の関連や構造を分析するためのデータ獲得を試みた。

また、インターネット調査ならではの利点として以下の2点が挙げられる。

① 匿名性の高さ

本研究の主たる対象者（性的少数者）は、一般的には社会的に弱い立場にあるとされている人びとである。質問項目には性的指向をたずねる設問が含まれており、氏名と住所を特定しておこなわれる郵送調査や面接調査では、個人（回答者）の特定への恐怖心や抵抗感から、回収率が低くなることが予想される。

いっぽう、インターネット調査ではモニターの氏名と住所について調査会社は把握しているものの、その情報は調査実施者に開示されないため、回答への抵抗感は比較的小さくなることが予想される。

② センシティブな質問に関する説明と同意

本調査には、セクシュアリティにかかわる質問のほか、いじめ被害経験や、自殺念慮・自殺未遂経験の有無など非常にセンシティブな質問項目が含まれる。そのため、ランダムサンプリングにより調査票を送付した場合、被調査者が回答の意思を固める前に質問文に目を通し、結果的に精神的負担を強いるという事態が懸念される。

いっぽう、インターネット調査の場合、あらかじめアンケートへの回答意思を有する人びとを対象としており、かつ事前調査と本調査の2度にわたり説明と同意を得ることが可能である。そのため、被調査者は回答を始める（具体的な質問文を読む）前に質問内容がある程度推測することが可能であり、明確な意思決定のうえで回答に臨むことが可能である。事前に複数回の説明と同意を得られることは、侵襲性への配慮という観点からも利点があると考えられる。

2.3 調査委託先

本研究では、実査（事前調査および本調査）を、株式会社マクロミル（以下、マクロミル社）に委託した。マクロミル社は、2004年1月9日付で「プライバシーマーク」を取得している。

2.4 倫理的配慮

事前調査、本調査とも、上智大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会の承認を受け実施した。調査実施時のインフォームドコンセントの概要を以下に示す。

まず、事前調査、本調査ともにマクロミル社が作成したWeb上のアンケート回答画面の冒頭にてインフォームドコンセントに関する説明文を提示し、同意が得られた者のみにそれ以降の質問が提示される仕様とした。このインフォームドコンセントに関して事前調査では、①調査目的、②回答の所要時間（目安）、③センシティブな質問が含まれていることの説明と該当項目の例示をおこなった。その上で、モニター自身によって現在の精神状態を考慮し、回答が可能か否かの意思表示を求めた。本調査においては、上記3点の説明に加え、④個人情報の保護とデータの管理、⑤アンケート結果の利用・公開、⑥精神的負担が大きいと思われる質問、⑦回答の中断・中止、⑧調査の実施体制と問い合わせ先（マクロミル社モニターサポート窓口）についての説明文を提示した。最後に以上の調査目的と留意事項に同意してアンケートに回答するか・回答を辞退するかの意思表示を求

めた。

2.5 事前調査（調査対象者の選定方法）

事前調査の目的は、マクロミル社に登録するモニターのなかから本研究の対象者を選定することである。質問数は調査の目的や質問内容に関する説明と回答意思の確認（同意）を含めた5問であり、2020年1月10日より開始した。調査対象者を選定するための項目（選定基準）は以下の4点である。

- ① 本調査には精神的負担が重いと思われる質問が含まれることを説明し、その具体的な項目を例示したうえで、モニター自身が現在の精神状態を考慮し「回答が可能である」と回答した者。
- ② 身体的性別（出生時の戸籍・出生届の性別）が男性であると回答した者。
- ③ 性自認（現在の自分の性別）を、出生時の性別と同じ、もしくは違和感があると回答した者。出生時の性別とは「別の性別」と回答した者は今回の調査においては対象外とした（トランスジェンダーに該当すると考えられるため）。
- ④ 性的指向を、「同性愛者（ゲイ）」「両性愛者（バイセクシュアル）」「異性愛者」と回答した者。「無性愛者（アセクシュアル）」「決めたくない・決められない」、「質問の意味がわからない」と回答した者は今回の調査においては対象外とした。

これらの質問文および選択肢については、釜野さおりほか（2019）を参照し、ゲイ・バイセクシュアル男性と異性愛男性のみを選定するための加筆修正を加えて使用した。そのほか、年齢、国籍、居住地（日本国内に在住しているか否か）については、モニター登録情報から、あらかじめ限定するよう調査会社に依頼した。

2.6 本調査

以下、本調査の概要を示す。

調査期間：2020年1月28日～2020年1月31日

質問数：56（インフォームドコンセント1問分含む）

主要な質問項目：年齢、婚姻状況、就業状況、現在の仕事の雇用形態（従業上の地位）、いじめ・ハラスメント被害経験の有無（時期ごと）と種類、現在のK6得点、Rosenberg 自尊感情尺度、性的指向を自覚した時期、カミングアウトした相手、カミングアウトした時期、性的

指向・性自認のアウティング経験、望まない性交渉の経験の有無、自殺念慮の有無・自殺念慮の時期、自殺未遂の有無・自殺未遂の時期等。

回収数：ゲイ・バイセクシュアル男性1,684件、異性愛男性1,854件

回収数は回答結果に著しい偏りがある（不誠実な回答と思われる）ケースをマクロミル社側で機械的に除外して納品された数である。納品後、さらにデータクリーニングをおこない、入力ミスや外れ値と思われる項目を含むケースをリストから除外することとした。除外したケースは、ゲイ・バイセクシュアル男性で16件、異性愛男性で3件である。データクリーニング後のサンプルサイズはゲイ・バイセクシュアル男性1,668件、異性愛男性1,851件となった。

【除外したケース】

- ・世帯人数が80人や90人等、極端に多いケース：5件（ゲイ・バイセクシュアル男性4件、異性愛男性1件）
- ・労働時間が極端に長い（週あたりの労働時間が24時間×7日）ケース：2件（ゲイ・バイセクシュアル男性）
- ・「現在の年齢」が「最後に通った学校を卒業した年齢」、「初職に就いた年齢」、「現職に就いた年齢」より若い等、矛盾のあるケース：11件（ゲイ・バイセクシュアル男性9件、異性愛男性2件）
- ・カミングアウトした人数が極端に多いケース：1件（ゲイ・バイセクシュアル男性）

3. 単純集計

以下に提示するのは収集したデータのうち、属性と主要な質問項目についての単純集計結果である。上述のとおり、本調査はモニターを対象としたインターネット調査であり、集計結果（割合）に代表性はない。ここでの意図は収集したデータの基本的な情報の確認である。

3.1 属性に関する質問項目の集計結果

まず、回答者の平均年齢は、ゲイ・バイセクシュアル男性41.69歳、異性愛男性47.26歳であった（表1）。

表1 年齢

| | 平均値 | 中央値 | 標準偏差 |
|---------------|-------|-------|--------|
| ゲイ・バイセクシュアル男性 | 41.69 | 42.00 | 9.772 |
| 異性愛男性 | 47.26 | 47.00 | 10.896 |

婚姻状況は、ゲイ・バイセクシュアル男性の69.8%が

表2 婚姻状況（ゲイ・バイセクシュアル男性）

| | 異性の配偶者と結婚している（事実婚を含む） | 日本国内または海外のパートナーシップ制度に基づいた証明書の交付を受けている（申請中を含む） | 海外の制度に基づき同性の配偶者と結婚している | 結婚しておらず、パートナーシップ制度に基づいた証明書の交付も受けていない |
|---------------|-----------------------|---|------------------------|--------------------------------------|
| ゲイ・バイセクシュアル男性 | 24.0% (401) | 5.3% (88) | 0.9% (15) | 69.8% (1,164) |

「結婚しておらず、パートナーシップ制度に基づいた証明書の交付も受けていない」と回答している。いっぽうで、「異性の配偶者と結婚している（事実婚を含む）」という回答も24%あり、およそ4人に1人は婚姻関係を有していることがわかる（表2）。異性愛男性では、「結婚している（事実婚を含む）」が62.9%であった（表3）。

表3 婚姻状況（異性愛男性）

| | 結婚している（事実婚を含む） | 結婚していない |
|-------|------------------|----------------|
| 異性愛男性 | 62.9% (1,165) | 37.1% (686) |

表4はゲイ・バイセクシュアル男性のみにたずねた「カミングアウト経験の有無」である。「カミングアウト経験あり」が47.2%、「カミングアウト経験なし」が52.8%であった。参考まではかの調査におけるカミングアウト経験の割合についてみてみると、LGBT総合研究所（2019）の調査では「誰にもカミングアウトしていない」という回答は78.8%であった。またNHKとLGBT法連合会（2015）が実施した調査ではカミングアウトを「誰にもしていない」という回答は6.2%であった。調査により割合にばらつきがあるが、これは対象者の属性や調査の実施方法による影響が大きいと思われる（本調査は性的少数者のうちゲイ・バイセクシュアル男性のみを対象としているが、LGBT総合研究所、NHKとLGBT法連合会による調査はその他のセクシュアリティも対象に含む。くわえて対象者の募集方法にも違いがある）。

次に、学歴（最後に卒業・修了した学校）についてみ

表4 カミングアウト経験の有無

| | カミングアウト経験あり | カミングアウト経験なし |
|---------------|----------------|----------------|
| ゲイ・バイセクシュアル男性 | 47.2% (787) | 52.8% (881) |

てみると、ゲイ・バイセクシュアル男性でもっとも多いのは「大学」44.9%であった（表5）。異性愛男性50.7%と比べると6%ほどの差があった。一般的にインターネット調査では学歴が高めになることが指摘されており、本調査の結果も国勢調査等と比べると大卒以上の割合が高めとなった（埴淵ほか 2015）。そのほか、割合としてはわずかな差であるものの、ゲイ・バイセクシュアル男性では最終学歴「中学校」が4.3%と異性愛男性2.1%に比べてやや多かった。

表6、表7は仕事の状況についてたずねた結果である。まず就業状況については、ゲイ・バイセクシュアル男性と異性愛男性の間にほとんど差はなく、どちらも約9割が「有職」であった。また、雇用形態については「常時雇用されている一般従業者・正社員（正規公務員を含む）」という回答がいずれにおいても最多であっ

表6 就業状況

| | 有職 | 無職 |
|---------------|------------------|----------------|
| ゲイ・バイセクシュアル男性 | 91.0% (1,459) | 9.0% (145) |
| 異性愛男性 | 89.2% (1,628) | 10.8% (197) |

表5 学歴（最後に卒業・修了した学校）

| | 中学校 | 高校 | 高等専門学校（高専） | 専門学校 | 短期大学 | 大学 | 大学院 | その他 |
|---------------|--------------|----------------|--------------|----------------|--------------|----------------|---------------|--------------|
| ゲイ・バイセクシュアル男性 | 4.3% (71) | 24.7% (412) | 0.6% (10) | 13.7% (229) | 1.7% (29) | 44.9% (749) | 9.4% (156) | 0.7% (12) |
| 異性愛男性 | 2.1% (39) | 24.7% (458) | 1.1% (21) | 12.1% (224) | 1.2% (22) | 50.7% (939) | 7.7% (143) | 0.3% (5) |

表7 現在の仕事の雇用形態（従業上の地位）

| | 常時雇用されている 一般従業者・正社員 (正規公務員を含む) | 臨時雇い・ パート・アル バイト | 派遣社員・契 約社員、嘱託 社員 | 経営者、役員 | 自営業主・ 自由業者 | 自営業の家族 従業者 | 内職 |
|-------------------|--------------------------------------|------------------------|------------------------|--------------|----------------|---------------|-------------|
| ゲイ・バイセク シュアル男性 | 63.8% (773) | 10.4% (126) | 12.8% (155) | 2.8% (34) | 9.0% (109) | 1.2% (15) | 0.0% (0) |
| 異性愛男性 | 68.3% (881) | 7.4% (96) | 9.1% (118) | 3.5% (45) | 10.0% (129) | 1.3% (17) | 0.3% (4) |

た。しかし、わずかな差ではあるが、ゲイ・バイセクシュアル男性では「臨時雇い・パート・アルバイト」「派遣社員・契約社員、嘱託社員」といった非正規雇用の割合が異性愛男性に比べてそれぞれ3%程度高かった。

職業との関連で、個人収入（年収）についてもみてみると、最頻値が400万円～500万円未満であることはどち

らも同じであるが、ゲイ・バイセクシュアル男性の方が400万円未満の該当が多かった（表8）。

3.2 主要な質問項目の集計結果（一部）

本研究の主目的は、性的少数者（ゲイ・バイセクシュアル男性）のメンタルヘルス悪化のメカニズムを検討することである。その際、重要となるのが対象者のメンタルヘルスの状態を計測する方法である。本調査では、これをK6尺度（Kessler et al. 2002）の日本語版（川上ほか 2005；川上 2007）を用いて計測することとした。K6はうつ・不安障害のスクリーニングを目的として開発された尺度であり、6つの質問に0～4点の範囲で回答を求め（逆転項目含む）、合計点が24に近いほどメンタルヘルスの状態に問題がある可能性が高いと判断する。

集計の結果、ゲイ・バイセクシュアル男性の平均値は7.53、異性愛男性は4.49であり、有意な差が認められた（表9、図1、図2）。K6得点で5点以上（5～9点）は「心理的ストレス相当」が疑われる水準である（川上 2007）。先行研究で指摘されてきたように、本調査においてもゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスの状態は悪い傾向にあるといえる。なお、2019年に実施された国民生活基礎調査における20～59歳男性のK6得点の平均値を算出したところ3.36であり、この値と比べると本調査のK6得点はゲイ・バイセクシュアル男性・異性愛男性ともに高いことがわかる。

また、参考まで自尊感情（Rosenberg 1965；山本ほか 1982）の状態をみると、異性愛男性に比べてゲイ・バイセクシュアル男性のほうが低い傾向にあることがわかる（表10、図3、図4）。

表8 個人収入（年収）

| | ゲイ・バイセク シュアル男性 | 異性愛男性 |
|-------------------|-------------------|-----------------|
| なし | 4.6% (77) | 2.8% (51) |
| 1万円～100万円未満 | 8.0% (133) | 5.9% (109) |
| 100万円～200万円未満 | 10.4% (173) | 8.3% (154) |
| 200万円～300万円未満 | 14.5% (242) | 9.7% (180) |
| 300万円～400万円未満 | 14.1% (235) | 14.6% (270) |
| 400万円～500万円未満 | 14.6% (244) | 16.6% (307) |
| 500万円～600万円未満 | 10.8% (180) | 13.0% (241) |
| 600万円～700万円未満 | 7.6% (127) | 9.0% (166) |
| 700万円～800万円未満 | 4.7% (79) | 6.1% (112) |
| 800万円～900万円未満 | 3.6% (60) | 3.7% (68) |
| 900万円～1,000万円未満 | 2.7% (45) | 3.3% (62) |
| 1,000万円～1,500万円未満 | 2.9% (48) | 5.6% (104) |
| 1,500万円以上 | 1.5% (25) | 1.5% (27) |
| 合計 | 100% (1,668) | 100% (1,851) |

表9 K6得点

| | 平均値 | 中央値 | 標準偏差 |
|---------------|------|------|-------|
| ゲイ・バイセクシュアル男性 | 7.53 | 7.00 | 6.483 |
| 異性愛男性 | 4.49 | 2.00 | 5.346 |

t(3239.605)=15.076, p<.001

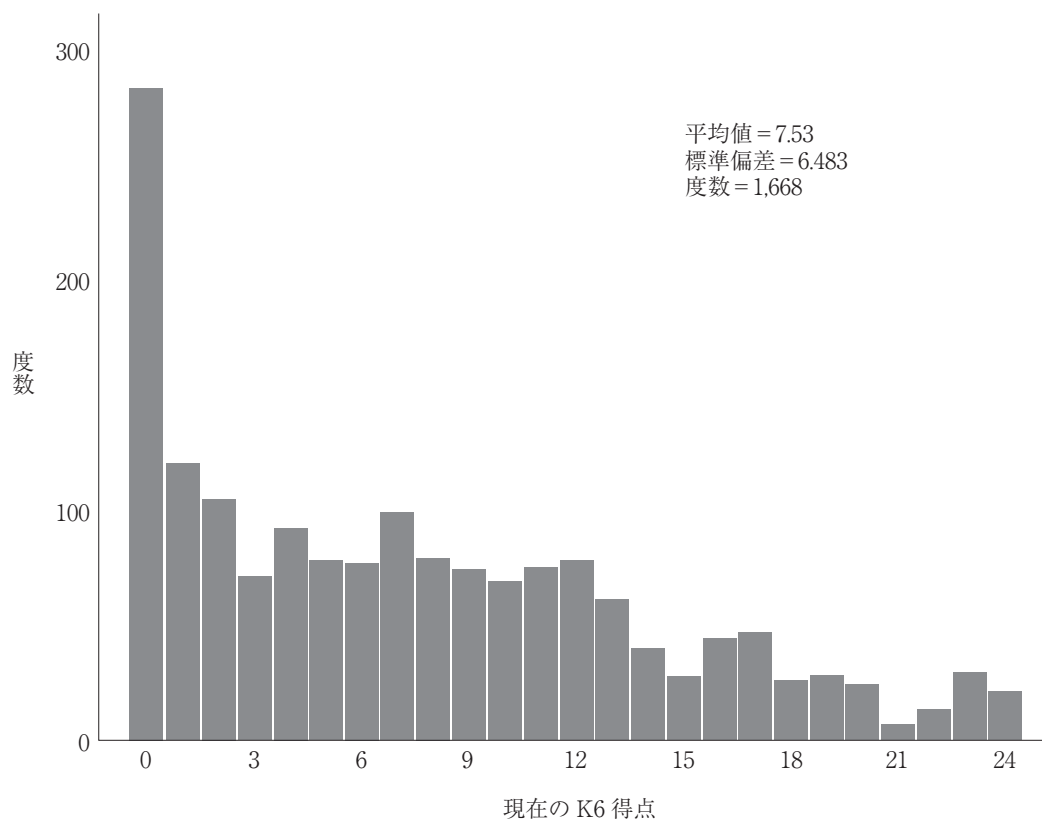


図1 K6 得点の分布 (ゲイ・バイセクシュアル男性)

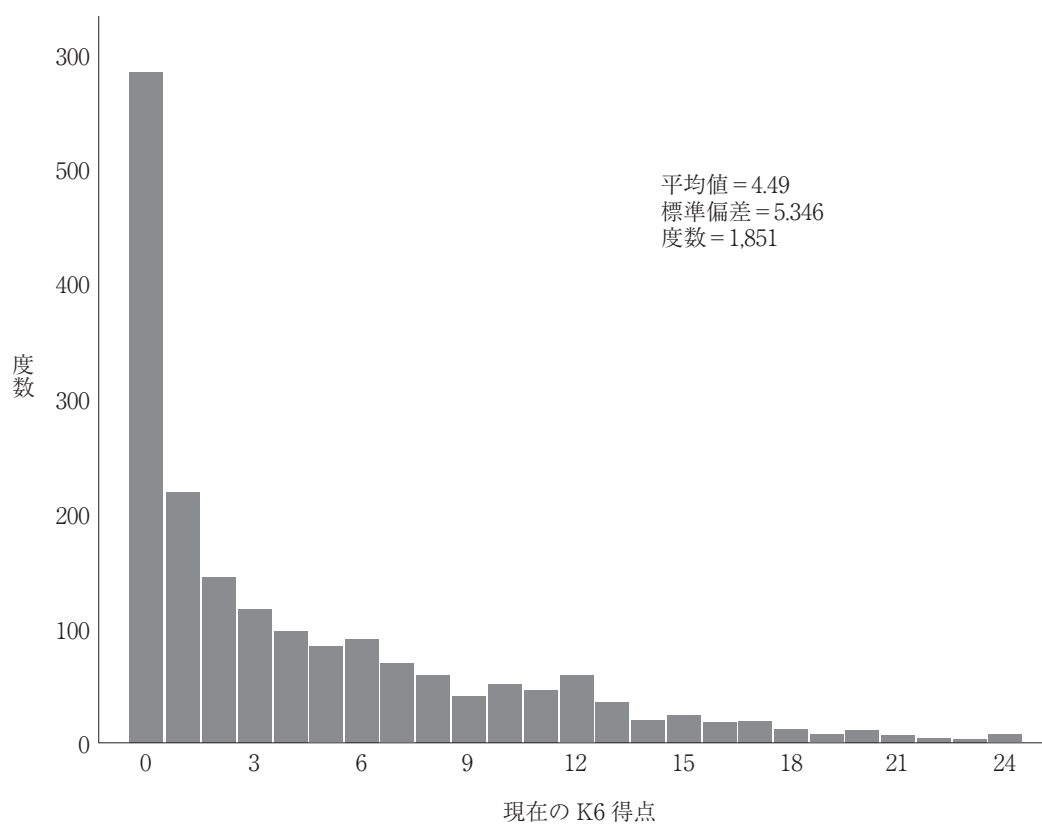


図2 K6 得点の分布 (異性愛男性)

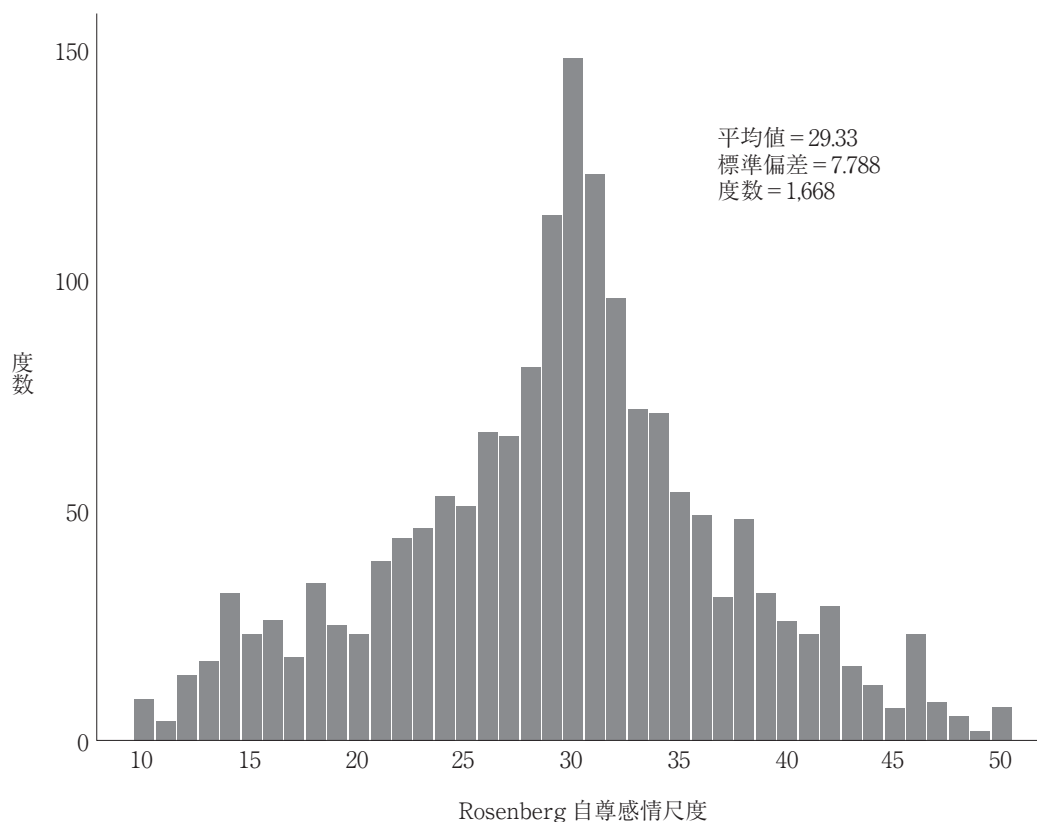


図3 自尊感情得点の分布（ゲイ・バイセクシュアル男性）

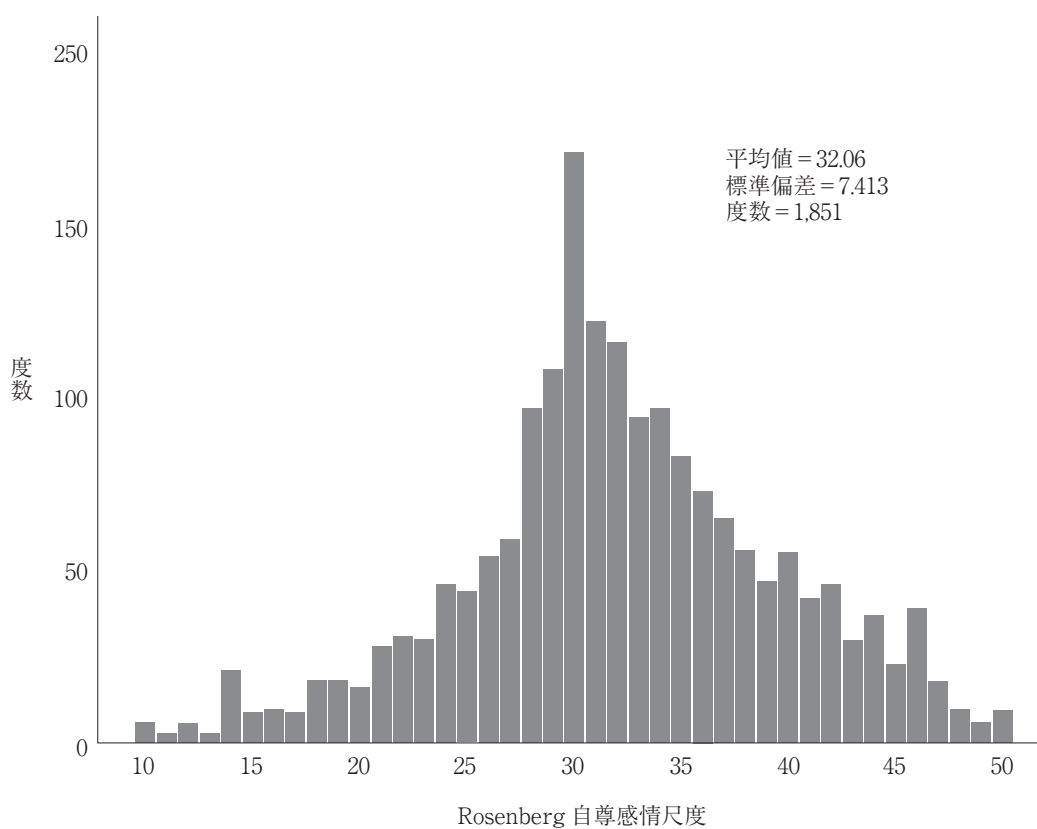


図4 自尊感情得点の分布（異性愛男性）

表10 Rosenberg 自尊感情尺度

| | 平均値 | 中央値 | 標準偏差 |
|---------------|-------|-------|-------|
| ゲイ・バイセクシュアル男性 | 29.33 | 30.00 | 7.788 |
| 異性愛男性 | 32.06 | 32.00 | 7.413 |

$t(3517) = 10.646, p < .001$

ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスを悪化させる要因のひとつに、いじめ被害経験が挙げられる(Hidaka & Operario 2006)。そこで本調査では、いじめ・ハラスメント被害経験について、時期ごと(小学校入学前～過去3カ月)に「まったくなかった」「ほとんどなかった」「ときどきあった」「よくあった」の4件法でたずねた。本調査では、いじめ・ハラスメントの種類(精神的、身体的、性的指向との関連)についてもたずねているが、ここでは被害経験の有無を集計した結果のみを提示し、K6得点との関連を簡単に確認しておきたい。

まず、いじめ・ハラスメント被害経験の有無を表11に整理した。集計方法は「ときどきあった」「よくあった」という回答を「被害経験あり」、「まったくなかった」「ほとんどなかった」という回答を「被害経験なし」とした。全期間を通じて1度でも被害経験があれば「被害経験あり」とし、1度もなければ「被害経験なし」にカウントしている。その結果、ゲイ・バイセクシュアル男性では63.8%が「被害経験あり」と回答しており、異性愛男性の38.5%を大きく上回った。

表12はゲイ・バイセクシュアル男性のK6得点(9点

表11 いじめ・ハラスメント被害経験の有無

| | 被害経験あり | 被害経験なし |
|---------------|------------------|------------------|
| ゲイ・バイセクシュアル男性 | 63.8% (1,065) | 36.2% (603) |
| 異性愛男性 | 38.5% (712) | 61.5% (1,139) |

$X^2(1) = 226.141, p < .001$

表12 いじめ・ハラスメント被害経験とK6得点(ゲイ・バイセクシュアル男性)

| | 被害経験あり | 被害経験なし | 合計 |
|-----------------|----------------|----------------|-----------------|
| K6得点 (9点以下) | 56.5% (609) | 43.5% (469) | 100% (1,078) |
| K6得点 (10点以上) | 77.3% (456) | 22.7% (134) | 100% (590) |

$X^2(1) = 71.434, p < .001$

表13 いじめ・ハラスメント被害経験とK6得点(異性愛男性)

| | 被害経験あり | 被害経験なし | 合計 |
|-----------------|----------------|----------------|-----------------|
| K6得点 (9点以下) | 34.8% (526) | 65.2% (985) | 100% (1,511) |
| K6得点 (10点以上) | 54.7% (186) | 45.3% (154) | 100% (340) |

$X^2(1) = 46.410, p < .001$

以下10点以上)と、いじめ・ハラスメント被害経験の有無をクロス集計したものである。いじめ・ハラスメント被害の経験時期や種類を考慮していないものの、K6得点10点以上では、「被害経験あり」が77.3%、「被害経験なし」が22.7%と顕著な差がみられた。このような関連は、異性愛男性においても確認されるが、ゲイ・バイセクシュアル男性に比べるとその差は小さかった(表13)。

4. まとめと今後の検討課題

以上、本稿では2020年1月に実施した国内のゲイ・バイセクシュアル男性(と異性愛男性)を対象としたインターネット調査の概要、および属性情報と主要な質問項目に関する回答を整理してきた。

本研究における主要な関心事項である性的少数者(ゲイ・バイセクシュアル男性)のメンタルヘルスについて、K6尺度をもちいてたずねた結果、その平均値は異性愛男性に比べて高く、メンタルヘルスの状態が悪い傾向にあることが確認された。

また、メンタルヘルスに影響を与える要因のひとつとして想定しているいじめ・ハラスメント被害経験についてもゲイ・バイセクシュアル男性において経験割合が高く、クロス集計の結果からも2つの変数の関連性が示唆された。

質問数・質問内容とも回答の負担が大きいことが予想された調査であったが、これら主要な質問項目への回答結果はおおむね先行研究と整合的であり、一定の精度を有したデータが得られたものと考えられる。本稿では調査実施の報告として単純な集計結果のみの提示にとどめたが、今後はほかの変数との関連を考慮しつつより詳しい分析を進めていく。

なお、そのような負担の大きいことが予想される調査であったにもかかわらず最後の質問として設置した自由記述にも予想を上回る多くの回答があり、今後テキストマイニング等による分析を試みる予定である。調査に対する苦情等については、質問数の多さ、質問内容についてそれぞれ1件ずつの意見が寄せられた。次回以降の調

査設計時の参考としたい。

参考文献

- Bolton, ShayLee and Jitender Sareen, 2011, "Sexual orientation and its relation to mental disorders and suicide attempts: Findings from a nationally representative sample," *The Canadian Journal of Psychiatry / La Revue canadienne de psychiatrie*, 56 (1): 35-43.
- 電通, 2019, 「『LGBT 調査 2018』についての補足説明」, (2020年11月28日取得, <https://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf-cms/2019002-0110-2.pdf>).
- Gallup, 2018, "In U.S., Estimate of LGBT Population Rises to 4.5%," Washington, DC: Gallup, (Retrieved November 28, 2020, <https://news.gallup.com/poll/234863/estimate-lgbt-population-rises.aspx>).
- 埴淵知哉・村中亮夫・安藤雅登, 2015, 「インターネット調査によるデータ収集の課題—不良回答、回答時間、および地理的特性に注目した分析」『E-journal GEO』10 (1): 81-98.
- Hidaka, Yasuharu and Don Operario, 2006, "Attempted suicide, psychological health and exposure to harassment among Japanese homosexual, bisexual or other men questioning their sexual orientation recruited via the internet," *J Epidemiol Community Health*, 60(11): 962-967.
- Hidaka, Yasuharu, Don Operario, Mie Takenaka, Sachiko Omori, Seiichi Ichikawa and Takuma Shirasaka, 2008, "Attempted suicide and associated risk factors among youth in urban Japan," *Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol*, 43 (9): 752-757.
- 釜野さおり・石田仁・岩本健良・小山泰代・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和・吉仲崇, 2019, 『大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート報告書（単純集計結果）』JSPS 科研費 JP 16H03709 「性的指向と性自認の人口学—日本における研究基盤の構築」・「働き方と暮らしの多様性と共生」研究チーム（代表 釜野さおり）編 国会社会保障・人口問題研究所内。
- 川上憲人・近藤恭子・柳田公佑・柳田公佑, 2005, 「成人期における自殺予防対策のあり方に関する精神保健的研究」『平成16年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）「自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究」分担研究報告書』167-73.
- 川上憲人, 2007, 「全国調査における K6 調査票による心の健康状態の分布と関連要因」『平成 18 年度政策科学総合研究事業（統計情報総合）研究事業「国民の健康状況に關する統計情報を世帯面から把握・分析するシステムの検討に関する研究」分担研究書』13-21.
- Kessler, Ronald C., Gavin Andrews, Lisa J. Colpe, E Hiripi, Daniel K. Mroczek, Sharon-Lise Normand, Ellen E. Walters and Alan M. Zaslavsky, 2002, "Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress," *Psychological Medicine*, 32: 959-976.
- 厚生労働省, 2020, 「令和元年国民生活基礎調査 世帯人員（12歳以上）、こころの状態（点数）・性・年齢（5歳階級別）」, (2020年11月23日取得, <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450061&tstat=000001141126&cycle=7&year=20190&month=0&tclass1=000001141142&tclass2=000001142126&tclass3val=0>).
- LGBT 総合研究所, 2019, 「LGBT 意識行動調査2019 結果サマリー」, LGBT 総合研究所, (2020年11月23日取得, https://www.daiko.co.jp/dwp/wp-content/uploads/2019/11/191126_Release.pdf).
- NHK・LGBT 法連合会, 2015, 「LGBT 当事者アンケート調査～2600人の声から～」, NHK ONLINE, (2020年11月23日取得, <http://www.nhk.or.jp/d-navi/link/lgbt>).
- Office for National Statistics, 2020, "Sexual orientation, UK: 2018," Newport: Office for National Statistics, (Retrieved November 28, 2020, <https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/culturalidentity/sexuality/bulletins/sexualidentityuk/2018>).
- Rosenberg, Morris, 1965, *Society and the adolescent self-image*, New Jersey: Princeton University Press.
- Sandfort, Theo G. M., Ron de Graaf, Rob V. Bijl and Paul Schnabel, 2001, "Same-sex sexual behavior and psychiatric disorders: findings from the Netherlands Mental Health Survey and Incidence Study (NEMESIS)," *Arch Gen Psychiatry*, 58 (1): 85-91.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子, 1982, 「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』30 (1): 64-68.

付記

本研究は JSPS 科研費19J01526 「性的少数者のメンタルヘルス悪化のメカニズム—混合研究法による実証的解明—」の成果の一部である。

1) 日本学術振興会特別研究員 (PD) / 上智大学総合人間科学部 / 専修大学経営学部兼任講師 (Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science/Faculty of Human Sciences, Sophia University/Faculty of Commerce, Senshu University)